



# 男は 痛い !

國友万裕

第11回

告白

## 1. ぼくを支えてくれたもの

### ① 水泳

丸太町のところに、京都踏水会という老舗の水泳教室がある。ぼくは、この水泳教室には10年ほど前まで通っていた。20代の後半から30代の前半にかけては、ここに通うサイクルに合わせて、生活をしているようなものだった。

踏水会の存在を知ったのは、京都に出てきて間もない頃。当時、河原町に大きな本屋があって、そこに踏水会のリーフレットがおかれていた。スポーツが全然できなかったぼくは、スポーツ・コンプレックスを解消するために行ってみたいなあーという気持ちは抱いたけど、実際に通うようになるまでにはハードルがいくつもあった。

まず、大学生にもなったような人が、プールなんかに通うのかという思い。今はスポーツクラブがいたるところにあるが、あの当時は今ほど多くはなかった。それにプールなんて、幼稚園や小学生の子が通うところというイメージもあった。リーフレットを見ると成人コースもあるみたいだが、運動神経が誰よりも鈍いぼくが他の人についていかれるだろうか。それにお稽古ごとなんかに通うのは、ほとんど女性であり、男は少ないだろうという思い込みもあった。あれこれ考えると、やはり行くことはできない。

そんなぼくが一大決心をして水泳を始めたのは、大学の3年生の時だった。最初は踏水会ではない。三条のところにあるYMCAのプールである。ここは自由遊泳のみだったので、自分のペースで泳いでいい。料金も安い。当

時は指導はついていなかったが、特別上手くなるろうとも思っていなかったし、それでいいかと通い始めた。

最初は 25 メートル、クロールで泳ぐのがやっとだった。平泳ぎはどう身体を動かしているのかがわからないので、適当に身体を動かして、疑似平泳ぎでどうにか 25 メートル行けるようになった。それから徐々に距離を伸ばしていき、50 メートル、100 メートル、200 メートルと行けるようになった。嬉しかった。俺だって、練習すればできないわけじゃないんだ。

思えば、混乱と葛藤の大学時代。大学ではつらいことばかりだったのだが、つらい時、寂しい時、惨めな時にぼくを慰めてくれていたのがプールだった。これくらい泳げるのは普通の人だったら当たり前なのだろうけど、当たり前のことがずっとできずに苦しんできたぼくは、多少、泳げるようになっただけでも、大きな喜びだった。

YMCA のプールには 1 年半通った。その後、少し自信をつけて、踏水会のプールへとのりだした。踏水会は指導つきである。成人コースで、まずは初級から、先生が丁寧に教えてくれる。それまで YMCA でだいぶ距離は泳げるようになっていたものの、形は自己流に過ぎなかったのだが、踏水会では形をただしてもらえる。先生たちは親切だ。もっと早くに踏水会に通っていればよかった。大学卒業間際になって、自分の居場所が見つかるなんて……。俺は、気がつくのがいつだって遅い。だから人なみになれないのだ。

その後、大学卒業間際で、どうにか大学院への進学が決まった。あの当時までは、まだ学者になる気はなかったし、とりあえず、モ

ラトリアムの期間を先延ばしにするための進学だったのだが、これで京都に留まれる、踏水会を続けることができると安堵したものだ。

大学の頃のぼくは、高校に行けなかったことの大きな引け目を背負っていて、だから普通の人の数倍も頑張ろうと日々もがいていた、しかし、どうしても突破口は見いだせない。ぼくは少年時代に失くしたものが大き過ぎたのだ。あれだけ、苦しんだのに、神様は心の居場所すら与えてくれなかった。あの当時、偶然読んだ小説が田村泰次郎の『肉体の門』だった。娼婦たちを描く話だが、彼女たちがすべてを憎むことで自分の境遇を受け入れているという行に、ぼくは痛く共感したものだ。すべてを憎む。あの当時のぼくには、それしかなかった。あの頃のぼくは、娼婦だったのだろうか。自我をなくして、彷徨っていた部分では、娼婦と通じる部分もあったのかもしれないのだ。そんなぼくが、わずかな時間だけでも、幸せに浸れるのがプールだった。

大学院の頃は、週に 3 回はプールに通っていた。5 回くらい行くこともあった。徐々にぼくの泳ぎの技術は上達していった。バタフライまでできるようになった。博士課程に進んでもからも、引きこもりの状態が続いた。その時も支えになってくれたのは踏水会のプールだった。踏水会は、日本泳法の試験があって、それも受けるようになって、指導科 2 級まではどうにか受かった。とりわけ楽しかったのは、夏の朝、子供たちとエンドレスプールで泳いだ日のことだ。これは、試験の項目の一つで、3 時間、一度も足を地面につけずに、平泳ぎで泳いでいくのだ。受験生は子供が多いのだが、あの時の水しぶき、朝の太陽、子供たちの瑞々しい熱気、先生たちの笑顔、今思

い出しても、ぼくの人生の最高の瞬間のひとつである。

あの当時、日曜日の朝の成人コースのプールも好きだった。ぼくが30代前半の頃。40代のおじさんが多かった。皆、いいお父さんで、プールサイドで、ちょっとだけ世間話をするのが、ひとときの男同士の触れ合いで、何とも言えなかった。とりわけ、立命館の出身で、宇治から娘を連れてやってきているおじさんは、朴訥とした人で好きだったのだが、ぼくがちょうど34歳になる頃、小学校6年生の娘を中学から立命館に入れたいから、日曜は塾の送り迎えがあるからとやめていった。寂しかった。もう、あれから16年。あのおじさん今頃何をしているだろうか。俺より10歳年上だったから、もう60だろうなあ。もう会うこともないだろう。

その後、ぼくは、男性運動を始めるようになり、あれこれ忙しくなったせいもあって、徐々に踏水会に行く頻度は減っていった。8年前に近所にスポーツクラブができ、こちらに鞍替えすることになった。ここにもプールはあるし、何よりも、ぼくの住んでいるところから5分くらいなので行きやすい。

しかし、今でも踏水会の人たちには感謝している。おそらく古顔の人は、ぼくのことを覚えてくれているはずだ。

## 2. ぼくを支えてくれたもの

### ②図書館

大学院で引きこもっていた頃、ぼくの支えになっていたもう一つのスポットは中央図書館だった。当時のぼくは、日本育英会（日本学生支援機構）の奨学金をもらって、細々と

生活していた。お金がないので、本を買うことはそうそうできない。中央図書館に置かれている本を1冊ずつ読んだ。大学院生であるにも関わらず、一般教養がなかったぼくは、研究書は読まずに一般書ばかり読んでいた。

中央図書館の近くには、二条公園があって、本を借りた後、この公園で読書したものだ。ここには当時ホームレスのおじさんが住んでいた。なぜか、ネクタイをしているホームレスのおじさんで、「ライターもっていませんか」と話しかけられたことがあった。普段、大きな声で独り言をいったりなさっているのだが、物腰はいたって紳士的だった。どういう素姓の人だったのかはわからない。相当長くホームレスをなさっていた記憶があるし、あの限界ではちょっとした有名人だった。しかし、いつのまにかいなくなられた。

いまは何処で何をなさっているのか。あの頃、40代くらいだったから、もう70くらいになっていらっしゃるかもしれない。なくなったのかなあー。いや、お元気そうだったし、まだ生きてはいらっしゃるだろう。

## 3. ぼくを支えてくれたもの

### ③レンタルビデオ

20代の後半の頃は、中央図書館で本を借りた後、近くのホビーズというレンタルビデオ店で、ビデオを借りていた。あの頃は、まだ1週間レンタルができなくて、毎日通って、片っ端から見たものだった。この店にある在庫でめぼしいものは見つekしてしまい、いくつものレンタルビデオ店の会員になって、掘り出し物のビデオを探すのが楽しみだった。10軒くらい会員になっていたと思う。

なかでも、重宝だったのは、京大前のステーションというお店で、ここはマニアックなビデオが勢揃いだった。ここにしょっちゅう通っていたのは30の頃。どうにか大学の非常勤の仕事ができるようになって、レンタルビデオも、1週間レンタルができるようになった頃だった。20代の頃まではアメリカ映画ばかり見ていたのだが、ここに通うようになってからは、日本映画やヨーロッパ映画の名作もくまなく見た。

かなり遅い深夜までやっていて、夜中に自転車を走らせたりもしたものだ。ちなみにこのお店はその後なくなったが、今でも、このお店の在庫をレンタルしているところが、麩屋町にある。ぼくも8年くらい前までは行っていたが、さすがにVHSよりもDVDの時代になってきたため、しばらく行っていない。でも、まだやっていると聞いている。あのお兄さん、お元気だろうか。

#### 4. ぼくを支えてくれたもの

##### ④カウンセリング

カウンセリングにぼくが通い始めたのは、30の夏の頃のことで、今から20年くらい前。ちょうどその頃からカウンセリングや心療内科が日の目を見るようになり始めたのだ。思えば、もっと早くにカウンセラーについて聞いたほうがよかったのかもしれない。しかし、それまでは、カウンセリングというと敷居が高かった。また不登校の時に逆戻りするようで、怖かった。それに当時まではカウンセリングというと高額だった。この頃から、良心的な料金でカウンセリングをしてくれる心療内科や、無料でやってくれる公立のカウンセ

リングなどが増えてきたのだった。

ぼくが30過ぎて最初についたカウンセラーは、25歳の男性。ぼくよりも5歳も若い、いかにも頭のよさそうな人ではあった。ぼくとの相性も悪くはなかった。しかし、彼はアルコール中毒で、1年ほどでカウンセリングをおりることになった。それで助っ人として同じ心療内科でぼくより1歳年上の女性のカウンセラーにつくののだが、この人とは相性が悪い。ぼくのほうからカウンセリングをおりた。

もうカウンセリングなんてやめようと思、寝つきが悪いので軽い睡眠薬だけもらおうと他の心療内科に行ってみると、運命的な出会いがあった。ここで働いているカウンセラーの人に見覚えがある。そうだ！ アメリカに留学していた頃に同じ大学に留学していた大学院生の人だ！！年はぼくよりも8つ上で、当時40くらいだった。この人のカウンセリングだったら受けてみたい。そう思って、再びカウンセリングを受け始めたのだが、アメリカじこみの衝撃のカウンセリングだった。ドンと核心に迫っていき、徹底的なセルフサポートの手法で、ぼくの心を立て直していく力技的療法だった。性格的な相性もよかった。ぼくとは顔見知りだったこともあって、私とかぼくではなく、「俺は」と話してくれて、兄貴みたいだった。普段は大学の先生で、心療内科にはバイトで来られていて、今でもいらっしやるはずだ。

この先生のカウンセリングでだいぶ回復したぼくは、その後、しばらくはカウンセラーのお世話にはならなかった。ところが、その3年後、男性運動に関わるようになり、そこで、フェミニスト・カウンセリングの世界では有名な女性がいると聞きつけて、コンタクトを

とってみた。ジェンダーの角度からのカウンセリングだったら新たなことが見えてくるだろうと思った。男女共同参画センターのカウンセリングで料金も無料だった。後で聞いた話だが、当時は原則女性しか受け入れていなかったのが、ぼくが男性運動に関わっているからという理由で引き受けてくれたみたいだった。彼女もよく勉強している人で、ぼくのほうもフェミニストのカウンセリングを受けることで、フェミニズムの勉強にもなった。

それから30代の終わりの頃、ぼくは大阪の関西カウンセリングセンターに通った。自分自身もカウンセリングの勉強をしたいと思ったからだ。クライアント体験ということで、受講生は、研修生のカウンセリングを無料で受けることができるのだが、ここでまたもうひとつの出会いがあった。当時、60代の男性で、元々はエリートサラリーマンだったのがうつ病になって、カウンセリングの勉強を始めたという人だった。普通は研修生だから、もっと拙いはずなのだが、ぼくはあたった人がラッキーだった。プロ以上の力量と知識をもっていた。何よりも大きかったのは、ぼくはこの人には、例の裸教育のことと、女性から受けたトラウマをたっぷり話せたことだった。それまでのカウンセラーにはその部分だけはつらくて話せなかった。しかし、いよいよ機が熟してきて、もっともつらかった経験を吐露できたのだった。

この先生は、「ジェンダーに囚われたというのでは、大変なご苦勞でしたよね」とぼくの苦しみを受け止めてくれ、「女同士集まって、誰かの悪口をいったり、誰かを理由もなく毛嫌いしたりという、女性独特の部分に傷つかれたんですね。男性だったら、自分の利害関

係のない人は気にしないですからね」と、多くの女性恐怖も理解してくれた。これは、それまで誰もいってくれなかった台詞だった。

さらに、3年前、ある認知療法のグループで公開カウンセリングをすることになって、知り合いの女性からクライアント役を頼まれて、カウンセリング無料で、交通費までもらって、この先生のカウンセリングを受けにいった。この先生もいい先生だった。落ち込んでいる時に電話すると、電話でも対応してくれた。

他にも何人かの先生についている。もちろん、なかには合わない先生もいたし、ちょっとしか関わらなかった先生もいる。しかし、これくらいカウンセリングを受ける機会に恵まれる人って、そうそういるものじゃない。ぼくは、クライアントのプロになる運命に生れついたのだろう。実は、この後、精神分析を受けることになっている。知人の先生が紹介してくださった先生で、ゴールデンウィークが明けたら、連絡してくれと言われている。この原稿がアップされる頃には、お会いしているはずである。

## 5. ぼくを苦しめるもの

### ① 男を悪者にする男性運動

今年の2月で、ついに50歳になった。ちょうど50歳の誕生日の頃、梅田を歩いていると、かつて同じ男性グループでおつきあいしていた男性とバッタリ会った。その人は、ぼくと同い年で、独身。子供の頃からスポーツができなかったともおっしゃっていたし、大人しいタイプの人で、グループで出会った人のなかでは、一番、ぼくに近い人ではあった。

ぼくは3年ほど前にグループの中心の人と

もめてやめてしまったのだが、その人は今でも、時々、出入りしていて、ぼくは時折、その人にメールして、愚痴をきいたりしてもらっていた。温厚で誠実な人なので、優しい返事をくれるのだが、もうぼくの愚痴にはうんざりしているだろうなあと、今年正月にメールしたのを最後に、しばらくメールしていなかった。梅田の雑踏の中でしばらく立ち話をした。ぼくは、まだ3年前のトラウマが抜けていないので、またあれこれその人にグループの悪口をもらした。

「まだ気になりますか？」と、その人からは言われた。その人は、ぼくがいつまでも引きずっていることが、理解できないみたいだった。今となっては、ぼくがもめた人よりも、ぼくのほうが人間関係にも仕事にも恵まれている。それなのに、ぼくがいつまでもそんな小さなグループのことにこだわっていることがわからないみたいだった。

なぜ、ぼくが引きずるのか。そこには様々な理由があるのだが、何よりも、ぼくが言わんとすることを、そのグループの人たちが理解してくれなかったということ。それが何よりも、ぼくのトラウマだった。いや、理解してくれないのはかまわない。しかし、理解していないのに、理解していると思いきまれるのは困る。二次被害を生んでしまうからだ。

あの人たちは、ぼくが古い男女観にしばられている、男は女よりも上位でなきゃいけない、女が下ネタしちゃいけない、男は負けちゃいけない、そういう考えから逃れられないから、女性から些細なことをされたことを大きくとらえてしまう、そう思っていた。自分たちが、かつてそうだったから、ぼくもそうだと決めつけてかかっているのである。

そうじゃないんだ。あなたたちと俺とは、考え方が違うんだ、生きてきた人生が違うんだといくら訴えたところで、わかってくれない。どう言葉を重ねてもわかってくれない。なぜ、これくらいのことがわからないのかとぼくはイライラさせられる。男性運動に関わり始めた頃から、このイライラは続いていて、思えば、もう15年である。

あの男性グループは、主としてDVの加害男性の支援をしている団体だった。そこに入りしている男性たちは、パートナーにDVしていた人が多いのだが、あの人たちを見ると、この人たちは男を加害者にしたいのかと思う時がたびたびだった。「男・加害者女・被害者」という先入観で男女を見ているという点において、フェミニスト、それも初期のフェミニストに似ている。何故なのか？あの人たちは女性にDVしてしまっている。DVなんて一部の男のすることだということになってしまったら、あの人たちはマイノリティ。悪い男というラベルを貼られてしまう。フェミニスト（正確に言えば、勉強不足なフェミニスト）は、全ての男が悪いような言い方をしてくれる。DVなんて絶対にしないような男であっても、男は男であるだけで加害者なのだという言い方をしてくれる。そうになると、あの人たちにとっては、都合がいい。罪の意識が軽減される。すべての男は悪者なのだから、DVをしてしまった俺だけが悪いわけじゃない。それに俺たちは、その贖罪のワークをしている。古い男性ジェンダーから抜け出そうと努力している。俺たちは普通の男よりも偉いんだ、進んでいるんだと、男性運動をしていることを理由に自分をヒーロー化しようとしている。そう感じるのが、しばし

ば、あった。

確かに、DV 加害の男性のことを悪人と決めつけるのは間違っている。人間だったら、心ならずも、他人を傷つけてしまうことはある。彼らが DV にいたる背景には、様々な経緯があったのだろうし、彼らは、自分の加害行為を認め、反省もしているわけだし……。しかし、ぼくのように女性から加害行為を受けた男性までを加害者にしてしまうのはいただけない。それでは男性差別である。男性被害を認めていないからである。ただでさえ、男性被害は取り合ってもらえない。男性は被害者になれない。その状況を悪化させる運動を彼らはしているのである。

ジェンダーの問題に目覚めた時期の違いが、あの人たちとぼくとの隔絶の原因であることは間違いなかった。前にある先生と話した時に、ぼくはそのことを訴えた。「ぼくは 15 で心が壊れたんです。だから自分が男だという確信ももてない。女性に権力を行使したりなんかはしていない。だけど、あの人たちは、30、40 になってからこの問題に目覚めているんだもの。ぼくとは目覚めた時期が違うんですよ」と。その先生は、「早い方がいいと思うけどなあ」と言ってくれた。ぼくは目覚める時期が早かったから、中年になって目覚める人よりも、よかったのかもしれないとおっしゃるのだ。

しかし、ぼくの若い時代は、水泳、図書館、レンタルビデオ……一人遊びばかりだった。そして話し相手はカウンセラー。一人遊びもそれなりに楽しかったけど、思えば孤独な人生だった。ぼくはまだ少年時代を取り戻していない。心の空洞は埋まっていないのだ。

ぼくは人格形成が終わっていない年齢で、

大きな挫折をしている。したがって、根源的な部分に傷がついてしまっているのである。

## 6. ぼくを苦しめるもの

### ② 女性を許せない心

神山征二郎監督の『白い手』(1990) という映画があった。これは椎名誠の自伝的小説の映画化であり、それなりに作品の評価は高くキネマ旬報のベストテンにもランクされている。ぼくは、キネマ旬報のベストテンに入選したやつは全部見たいと思うのだけど、この映画は敬遠してみなかった。未だに見ていない。この映画だけはなあー。これから観たいと思う日が来るのだろうか。今のところ、まだ見る気にはならない。

この映画、椎名誠の自伝的小説をベースに、彼の少年時代を描いた映画だが、当時アイドルだった南野陽子が小学校の先生役で出ていて、この映画の予告編では、南野が小学生の男の子たちを廊下に立たせて、ビンタを食らわせていく場面がでてくる。椎名誠は確かインタビューで、小学校の頃、若い女の先生から殴られて、興奮したみたいなことを語っている。そういう奴もいるんだろなあー。しかし、ぼくはこの場面があることがわかっているがゆえに、この映画だけは見ることができない。まだ未だに。

前にも書いたと思うが、ぼくの小学校の時の女の先生は、男子生徒にのみ厳しい体罰を与える先生だった。ぼくのジェンダーへの囚われの原因をつくったのがこの先生であることに疑いの余地はない。中学の時の裸教育の体育教師、不登校の頃のカウンセラー、他にもたくさん不幸な出会いはあった。しかし、

ぼくの人生の最大の不幸な出会い、それはこの先生との出会いだった。この先生と出会ったことで、ぼくの人生は大きく潮流から外れていったのだった。

確か、神谷美恵子さんがおっしゃっていたと思うが、人間はまず自分の性（男に生れたこと・女に生れたこと）を受け入れなければ幸せにはなれない。そして、ぼくが男に生れたことを受け入れられず、結果的に不登校にまでなっていく原因をつくってしまったのは、この先生なのである。そして、悩んでいたぼくを心なく傷つけた数々の女性たちが、ぼくの女性への偏見に油を注ぎ、結果的に、ぼくは、ぼくに対して好意的な女性に対しても偏見をもつようになってしまった。女性全般を憎むようになってしまったのだった。

こんなぼくを理解してくれる人は少ない。女が男にトラウマを負わされて、男性全般に偏見を抱くのは同情してもらえる。前に女性専用車両の話になった時、ある女性が、「痴漢をする男性は一部だろうから、女性専用車両は男性差別だけでも、痴漢の被害にあった女性のなかには怖くて乗れなくなってしまう人もいるから」と同情的な解釈を示されていた。それを言うんだったら、男だって、一部の女性からトラウマを負わされれば、女性全般が怖くなっていくことだってあるはずなのに……だけど、それは、その男性本人のとらえ方の問題と軽く一蹴されてしまう。同情してくれる人なんて、ほとんどいないのだ。

ぼくは15で心が壊れ、大検を受けてどうにか大学に入り、それからプールに通い、カウンセリングを受け、様々な映画や本に触れて、少しずつ壊れた心を立て直してきた。今では人間関係も充実している。しかし、女性を許

すことだけは未だにできないのである。

DV被害者のあさみなさんの『いつか愛せる』はとてもいい本だけでも、ぼくが、女性を「いつか許せる日」がくることを祈るのみだ。思えば、もう50代。もう許さなきゃいけない年なんだけど、まだ許せてはいない。許せないままに、ぼくの一生は終わっていくのだろうか。今度、精神分析を受けようと思っているのは、許せる日が来るかどうか、確かめたいからである。

## 7. 憎しみ返し……な～んてね。

中島哲也監督、松たか子主演の『告白』（2010）は、作品の評価はきわめて高く、この年のキネマ旬報のベストテンの2位である。

原作はベストセラー作家の湊かなえだが、彼女の作品は映画やドラマにもしばしばなっていて、小泉今日子主演のドラマ『贖罪』も面白かったし、今年になってから封切られた中村義洋監督の映画『白ゆき姫殺人事件』も楽しかった。小説のほうはまだ読んでいないのだが、読んでみたいと思っている。

湊かなえ原作の映画の特徴は、女性のいやな面を存分に描いているところだ。ぼくみたいに女性から傷つけられた男は、カタルシスを感じる。しかし、男性運動家の人たちは映画も小説もあまり読んでいないのだろうか。女性の怖さは、湊かなえと限らず、小説や映画では昔からたくさん描かれてきているのだけど、あの人たちはあくまでも女性を可哀そうな被害者にしてしまおうとする。

『告白』の松たか子扮する中学教師は、娘を殺されたという部分では被害者だが、感女の行動は鬼気迫っていて同情の余地もない。

映画は、彼女が生徒の前で、「私の娘が殺されました。警察は事故死だと言っていますが、このクラスの子が殺したのです」と語る告白から始まっていき、「あなたの更生はこれから始まるの」と恐ろしい表情で生徒の髪をわしづかみにする彼女のアップで終わっていく。しかし、この台詞の後に、一呼吸おいて、「な～んてね」という言葉が続いて、そこにエンドタイトルが流れていく。憎しみ返しのドラマである。

映画のなかで、「憎しみを憎しみで返すこと」は間違っているという台詞が出てくるが、憎しみを背負って、復讐の鬼と化した主人公は時として、とても魅力的に見える。それは彼らが純粹であるがゆえに、社会や人間の不合理さに傷つき、その憎しみも大きくなるという解釈が可能だからである。

「な～んてね」という落ちをつけることによって、この映画は全体をちやかしている。人を批判する時は、ユーモアが大事。この落ちがあることで、この復讐劇のトーンが変わるのである。

ぼくも、これから「女性加害・男性被害」をさらに訴えていくつもりではいるが、最後には、「な～んてね」と落ちをつけて、女性から嫌われないようにやっていかななくてはならない。

男は痛々しいんだから、女の人たちも更生してね、な～んてね（笑）。